岩手医科大学附属図書館巌手醫學文庫『絵本黴瘡軍談』について
―船越敬祐の文理融合的な梅毒治療普及活動―

平林　香織[1]，今栄　駿介[2]，河原　嵩[2]，秋元　成鎬[2]

（受理　2018年12月７日）

１　はじめに―問題の所在

岩手医科大学附属図書館では、411点1,397冊の和漢古書を本館館長室に別置する。そのほか、附属図書館分館では、和漢古書498点2,056冊を整理中だ。2016年には、本学創立者・三田俊次郎（1863－1942）の師である三浦自祐（1828－1911）の御子孫から、和漢古書143点383冊が寄贈された。2017年、創立120周年記念事業の一環としてこれらを巌手醫學文庫と命名、保存･顕彰の方途を検討中である[(1)]。

本稿では、巌手醫學文庫『絵本黴瘡軍談』（船越敬祐著、天保９年〈1838〉刊、５巻３冊。以下『黴瘡軍談』と略）を取り上げる。江戸時代後期の梅毒医・船越敬祐が、病と薬とを擬人化し合戦物に仕立てた。『黴瘡軍談』は医学書でもあり文芸書でもある。このような二面性をもつ本書には、医学史的文学史的にどのような存在意義があるのだろうか。

本書は、これまで数多くの江戸時代梅毒書の１冊として言及されるにすぎなかった。単独で取り上げたのは、2014年、豊岡瑞穂氏による論考がはじめてである[(2)]。氏は、擬人化や『三国妖婦伝』のイメージにより、滑稽本や読本の趣向を取り混ぜた文学作品として本書を評価した。本稿では、氏の論考をふまえつつ医療読み物としての本書の特質について検討したい。

２　巌手醫學文庫における『絵本黴瘡軍談』の位置付け

岩手医科大学産婦人科学講座助教授だった國本惠吉氏（1934－2009）は、巌手醫學文庫に、盛岡藩の藩校・作人館（はじめ明義館）、洋学校・日新堂（1861）、また同時期の医学塾・廻生堂の流れを汲む蔵書があることを明らかにした[(3)]。

本学創立者・三田俊次郎は、医学を廻生堂で学んだ。主宰した三浦自祐は、八角高遠の私塾に入門後、京都の順正書院に学んで西洋医学を修めた。三浦自祐が学んだ順正書院とは、新宮凉庭（1787－1854）が京都東山の南禅寺脇に開いた医学塾である。凉庭は理財家としても世に知られていた。

『岩手人名辞典』は「岩手の医学史で忘れられない１人」として凉庭を立項する[(4)]。また、國本氏は、凉庭と南部藩との関係についても調査している[(5)]。

江戸末期、盛岡藩は飢饉や藩政の失敗から財政難に陥る。第12代藩主南部利済（としただ）（1797－1855）は、

[1] 岩手医科大学　教養教育センター　人間科学科　文学分野
[2] 岩手医科大学　医学部

理財家・凉庭に藩政を問う。『駆豎斎文鈔』（1863年跋）所収「上盛岡少将公」は、凉庭の南部藩財政改革を綴る。凉庭は、天保11年（1840）４月に京都を出発、盛岡藩の江戸藩邸に立ち寄ったあと来盛、５月６月と滞在。財政立て直しのために、質素倹約・勧農・教育の重要性を説き、財政再建資金を上方の豪商に用立てさせ、自身も１万両を拠出した。京都から盛岡への道中に凉庭が詠んだ漢詩集『駆豎斎詩鈔』（1861年序）、養子・新宮涼閣（1828－1885）の『鬼国先生言行録』（1885）からも盛岡でのようすがわかる。凉庭は盛岡から帰京の際、藩医・八角高遠（1816－1886）と飯富了伍（1813－1867）を伴う。２人は順正書院で西洋医学を学び帰盛後、西洋医学の実践と医学教育に奔走した。

八角高遠の高弟だった三浦自祐は、高遠の勧めで順正書院に学んだのだろう。自祐の廻生堂に入門した三田俊次郎は、新宮凉庭の孫弟子といえる。

ところで、近時、本学医学部長・佐藤洋一氏によって新渡戸仙岳揮毫・新宮凉庭先生遺訓「為医十五則」（34cm×121.5cm）が見いだされた[6]（写真１）。

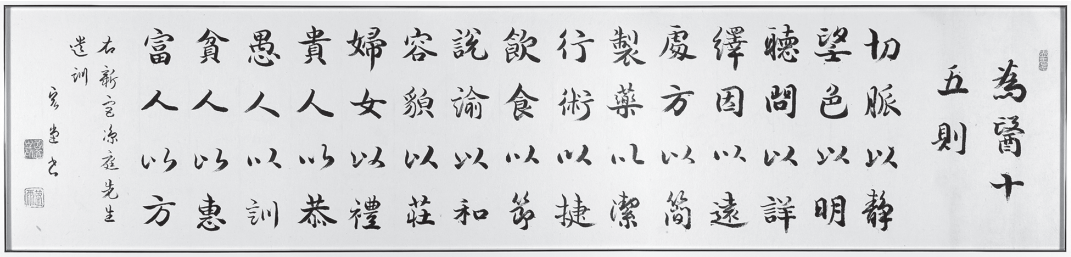

写真１

新渡戸仙岳（1858－1949）は盛岡出身の教育者・郷土史家・能書家。盛岡高等小学校（現盛岡市立下橋中学校）校長や盛岡高等女学校（現岩手県立盛岡第二高等学校）校長などを歴任後、新聞事業に携わった。盛岡市ホームページによると仙岳は幼くして日新堂に学んだ[7]。八角高遠や三浦自祐を通して順正書院や新宮凉庭について聞き及んでいただろう。教育者として凉庭の学問にも通じていたはずだ。

解剖学者・医学教育学者の佐藤氏によると、「為医十五則」は、脈診・視診・問診といった診察の基本事項にはじまり、病気ではなく病人を診るという総合的な診断を謳い、患者本位の診療、医師としての自己管理、患者に接するときの態度にまで言及し、現代の医学教育にも適応可能だという。最後の二項は、貧しい人からは報酬を取らない、富める人には時宜を得た最高の治療を行うというもので、理財家でもあった凉庭らしい。

山本四郎氏の調査によると、「為医十五則」は、もともと順正書院に掲げられていた４メートルを越える扁額であるという[8]。順正書院に学んだ三浦自祐は「為医十五則」を日々目にしていただろう。そして漢方主体の藩校だけでは不十分であると考え廻生堂を設立する。民の立場で救世済民を考え、医学教育を行った。その高弟・三田俊次郎も、東北地方の医療の貧困を救うために、東奔西走する。議会を説得し、1897年、岩手県が廃止した岩手病院を買い取り、私立岩手病院を経営し、さらには私立岩手医学専門学校（1928年開校）・私立岩手医科大学（1948年開学）で医療人育成に尽力した。三田は、1951年岩手大学との合併が協議されたとき、理事長として、教授会決議案を覆して民の立場を貫いた。凉庭の資産は莫大で、越前藩にも１万５千両を貸与しているが、三田俊次郎もまた私財を投じて病院と学校を経営し、私費による奨学金を設置し、優秀な医学生を育てた。岩手医科大学初代学長三田定則もその１人だ。仙岳書の「為医十五則」は、現在、附属図書館分館の入り口に掲げられている。

さて、『黴瘡軍談』の作者・船越敬祐（生没年未詳）は凉庭と同時代人である。凉庭同様、出自は貧しく、

長崎に遊学し、民間医として一生を終えた。船越は自ら処方した梅毒薬を安価に販売し、蔓延していた梅毒の治療に専心。それまで金属で作られていたカテーテルをゴム製にするなどして、安価で安全な治療を行うことを心がけた。梅毒における医の貧困を民の立場で救った人である。

新宮凉庭、三浦自祐、三田俊次郎に流れる民による救世済民の意識が、船越敬祐にもあった。凉庭は儒医であったから、漢文の読み書きに通じていたが、自身でも漢詩を多く作った。三田俊次郎は医療人にとって大切なのは教養であり、それを学ぶための図書館が重要であると考え、いち早く岩手病院内に私立岩手図書館を設けた。巌手醫學文庫の原型である。巌手醫學文庫の４分の３は『解体新書』（転写本）をはじめとする医学書であるが、残り４分の１は歴史・文学・芸術などの人文社会学系の本である。岩手病院付設の医学講習所や産婆・看護師養成所では、医学を修める際に人文社会学的な発想と態度が重要であることを理解し、文理融合教育を行ったのだ。

巌手醫學文庫『黴瘡軍談』は、1913年２月、大橋珍太郎（1868－1951）によって寄贈された。大橋は、県立岩手病院附属医学講習所で学び、三田俊次郎の後をついで第２代岩手県医師会長となり、1939年から花巻市長を１期勤めた。

大橋もまた文理融合の人である。

薩摩藩士・肝付兼武の『東北風談』を翻刻したり、「医」と「薬」に関する諺を収集した『新輯医薬俚諺語彙』（医事新報社、1940年８月）を刊行したりした[9]。『新輯医薬俚諺語彙』の冒頭「医は仁術」には『大言海』『古今医統』『医医病書』『梅園叢書』『伊賀越道中双六』『白川侯伝心録』『風俗見聞録』『伽羅先代萩』『海録』からの用例を引く。驚くべき引用範囲の広さだ。表紙には「後の世は紙喰う蟲とならばなれ書（ふみ）てふ書は読みつくさなん」という短歌を印字、子息・大橋秀治の跋文には「平生好んで古書陳藉を読む」とある。稀代の読書家であった。

大橋は、大正10年（1921）に創刊された医学雑誌『日本医事新報』に数多く寄稿している（25件）。田能村竹田の漢戯文『百活矣』（1816）や亀田鵬斎『摩訶酒仏妙楽経』（1823）の解説文などである。「玉盃無底録・貧乏神考証・轆轤首考証」と題して、古今の「男嫌ひ女嫌ひ」のリスト（景行天皇妃弟媛から1941年に戦況視察中に殉職した須賀彦太郎までの59名と員外・在原業平）を作ったり、「貧乏神」「轆轤首」の考証を行ったりもしている。『日本医事新報』第787号（1937年10月）には、「鬼国山人著破レ家ノツヾクリ話の事」と題する小文を寄せ、新宮凉庭を取り上げた。宮沢賢治とも親交があり、大橋が「無価」の俳号で五七五の長句を詠み、それに賢治が七七の短句を付けた付合20句がある[10]。花巻農学校に奉職していた賢治が、花巻市長である大橋に対して奨学生について書き送った書簡もある[11]。

大橋の著作物から、博覧強記でユーモアを好み、好奇心旺盛な人物像が思い浮かぶ。彼にとって薬将と病将の合戦物『黴瘡軍談』は、医学的興味と文学的興味をともに満足させる作品だっただろう。それを黎明期の本学附属図書館に寄贈した。

そのほか、相澤寧（号・暁村、1880－1968）が、1955年に古医書34点82冊を寄贈している。相澤もまた、医師でもあり、俳句結社銀河社を主宰する俳人でもあった[12]。岩手県二戸郡浄法寺村で村医をするかたわら句作を行い、1906年年末年始には河東碧梧桐を自宅に迎えている[13]。

巌手醫學文庫は、医師としての人間性陶冶に必要な文科を重視する文理融合的な思想を掲げた先人の遺物にほかならない。『黴瘡軍談』は、梅毒治療法を説いた本でもあり、擬人化合戦物でもある。医学書でもあり、文学書でもある。さまざまな意味で、救世済民を考える医の文理融合思想の水脈をひくものといえる。

以下詳しく検討していこう。

3　『絵本黴瘡軍談』書誌と船越敬祐について

巌手醫學文庫『黴瘡軍談』の書誌は以下のとおりである。

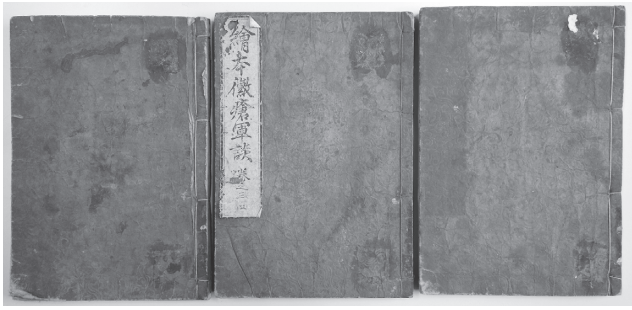

写真２

写真３

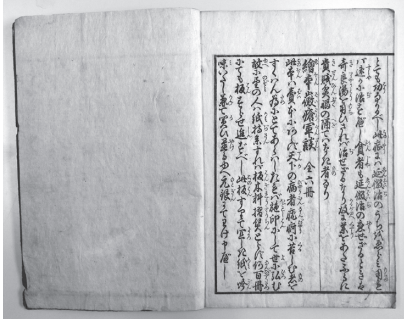

写真４

大本３冊。天保９年(1838)、刊本、私立岩手医学図書館・岩手医学専門学校図書館の印、楮紙、袋綴。３冊ともに「大正弐年二月／大橋珍太郎氏寄贈（全参冊）」（朱書）、「第二〇八号」（墨書）の書き入れあり（第１冊は３丁裏、第２・３冊は扉）。

【第１冊】題簽はがれ。表表紙：小豆色唐草地紋、裏表紙：小豆色蜀江酢漿草小菊地紋。22.4㎝×15.5㎝、全54丁。巻一・巻二合集。扉に「浪花烽山重春画　蔵六亭蔵版」。序あり「天保九年戊戌三月　櫟陰散人」。挿絵：半面４図、見開４図、本文挿入１図。

【第２冊】原題簽「絵本黴瘡軍談軍談巻之三四」。表紙：小豆色唐草地紋。22.5㎝×15.6㎝、全55丁。巻三・巻四合集。挿絵：見開６図。

【第３冊】題簽はがれ。表紙：小豆色唐草地紋。22.2㎝×15.6㎝、全57丁。巻五・「黴瘡雑話」合集。挿絵：見開３図。『黴瘡軍談』末に「書図　烽山重春／筆耕　一三之巻　森晋三／二之巻　中彌左衛門／四五之巻　森英三／六之巻　浦邉良齋／剞劂　志保山喜助」。巻末に無料頒布の注記。刊記なし。

扉（写真３）にある挿絵画家・烽山重春（1802－1849）は、大坂の浮世絵師柳斎重春である[14]。丸丈斎［滝川］国広門人のち柳川重信門人という説があるが詳細は不明。『黴瘡軍談』が刊行されたときには36歳。

第３冊巻末の薬の購買者には無料で印行・配布するかという注記（写真４）は、次のとおり。

> 此本は売本にあらず。天下の病者(びょうにん)疣痾(なんびょう)に苦しむ者をすくはん為にとてあらはしたれば、施印(ほどこしはん)にして世に弘む。故に望(のぞみ)の人は紙持参すれば、板木料摺賃とらず、何百冊にても板すらせ進ずべし、此板すりて宜しき紙を吟味いたし兼て買ひ置けるゆへ、元銀にてわけ申すべし。

諸本についての詳細は後考を期すが、この頒布注記があるものとないものとに分けられる。５巻５冊、５巻３冊、５巻１冊の形態があるが、現在確認した範囲では、注記があるのは、巌手醫學文庫本（３

冊本)、京都大学大惣文庫本（３冊本)、東京大学附属図書館蔵本（５冊本）である。注記がないのは、早稲田大学図書館蔵本（５冊本)、東京大学附属図書館蔵本（１冊本)、京都大学富士川文庫本（５冊本)、内藤記念くすり博物館蔵大同文庫本（現存巻５のみ)。

無注記の本は、早稲田大学本以外、刊記に書肆が複数並ぶ。富士川文庫本と東京大学３冊本は、刊記の書肆は同一。京都･河内屋藤四郎を筆頭に、江戸６、大坂２の９店。東京大学５冊本の刊記には、江戸の丁子屋平兵衛･釜屋又兵衛、京都の吉野屋仁兵衛、大坂の河内屋太助（版)･河内屋原七郎（行）が並ぶ。また､｢伯耆国医生今浪花住錦海　著書目録」を付す。２丁分の著書目録には『黴瘡軍談』『黴瘡茶談』『黴毒方撰』『外療便覧』『薬方集覧』『妙薬奇覧』『医道年代記』の計７冊の広告と、「新製ゴムカテイテル」「重粉」の広告が載る[15]。

注記の有無は、薬の需要の高まりと『黴瘡軍談』の読み物としての面白さによる取扱書店の拡大を暗示する。無刊記の巖手醫學文庫本は、刊記がある諸本よりも早い時期のもので、薬の購入者持ち込みの紙に印刷されたものである可能性が高い。

なお､上記「著書目録」のうち現存するのは､さまざまな薬の処方を記した『妙薬奇覧』(1827年序)、梅毒の治療法を記述した『黴瘡瑣談』(1831年序､1843年改題『黴瘡茶談』)､そして､『黴瘡軍談』(1838)である。

船越敬祐について伝記的には次のようにいわれる[16]。

> 船越敬祐は米子の大寺屋船越家の分家鍋屋船越の出であるという、生没年は判らないが、嘉永年間（一八四八－五三）頃には死亡しているものと思われる。名は晋、通称は敬祐（啓祐)、字は君明、錦海と号していた。その父は二九才で没したため、子供の頃より大仙台屋の丁稚小僧に出され、才智優れていて出世して手代、番頭となったが、女遊びが過ぎて難症の梅毒を患った。そこで意を決して大坂に出て医家に住み込み病気の治療につとめ、医師それも梅毒専門の医師となる決心をした。
>
> 京都の宮廷医錦小路家の門人となり、又長崎に出て蘭医術を覚えて大坂に戻り、北久宝寺三休橋近くに開業した。そして水銀剤による駆梅薬をいくつか研究製剤化し、文政、天保（一八一八－一八四四）頃には梅毒専門医として有名となった。文政一〇年には妙薬奇覧を刊行し、天保九年（一八三八）に黴瘡軍談を、天保一四年には黴瘡茶談を書いて出版した。

『黴瘡瑣談』には船越が梅毒に罹患した経緯が書かれる[17]。

> 余が父母も此病に罹りて天年を終らず。父は廿九歳にて世を去り、母は四十四歳にて世を去る。余も又若年のとき此病に数年くるしみ、種々の方剤を用ひるに寸効なし。此に於て一医生（ある い しゃ）に、委しく病苦を演舌し、「此の如く世に長く苦しまんより速やかに死するも又幸ひなり。故（かるが）ゆへにいかなる劇薬もおそるゝ意（こころ）なし、願はくは十死一生の劇治を施したまへ」と乞ふに

両親ともに梅毒患者で、父は29歳、母は44歳で亡くなり、船越は若年で梅毒に罹患した。母子感染の可能性もある｡長く苦しんで死ぬよりも劇薬で死んでしまう方が良いと｢劇薬｣｢劇治｣を医者に頼む。水銀剤の副作用に苦しむばかりで、治らないため、自ら「延寿丸」を発明し、完治。米子に18年暮らし、その後松江で４年過ごしている間に『黴瘡軍談』を著述したという。

何歳で罹患し、何歳で『黴瘡軍談』を書いたのかは明らかではないが、自分の体を治すために医者になった。江戸時代、幕府や藩から禄をもらう幕医・藩医のほか、儒学者のかたわら医業を行う儒医

があった。新宮凉庭は儒医である。儒医のなかには藩医に取り立てられるものもあった。そのほか医塾や師匠に学んだ知識と経験をもとに開業する町医があった。船越は町医として、梅毒とがっぷり四つに組んだ。

4 『絵本黴瘡軍談』の内容

『黴瘡軍談』は、本文の前に、「序」「述意」「凡例」と登場人物紹介図版を載せる。

漢文体の「序」は「櫟陰散人」による（写真３参照）。「天保九年戊戌三月」とある。冒頭、「予が友船越君明、医を業とす」「内外諸科に兼通せざること無く、最も良く黴毒を攻む」と紹介する。「此症治方に於て苦心研尋二十年間、遂に発明する所有り」とあるので、船越と梅毒の戦いは文政のはじめ（1818）ごろに遡ることになる。

船越は和文による読みやすくわかりやすい書き方で、「盲医の毒手」から患者を守ろうとしたが、「軽薄の子弟」は、和文で書かれた船越の著作をないがしろにする。そこで最近流行っている「小説の体」を用いて「病薬交戦」の話を作ったと説明する。「寓言を仮て、実用に帰す」ことは「巧手段善方便」であり、「世に益有るの書」であるという。単に「小説の流」として読まれることは「君明が意に非ず」と結ぶ。

ここに書かれる「寓言」とは、『荘子』の「寓言篇」による語だ。荘子は、「寓言は十に九」「寓言十に九は、外を藉（か）りて之を論ずるなり」[18] と言った。寓言とは「ほかの事物を借りて道を論ずる」[19] 言説である。江戸時代、俳諧や小説を論じる際に多くの文人が用いた。たとえば、小説家で俳諧師だった井原西鶴（1642－1693）は弟子に向かって「寓言と偽とは異なるぞ。うそなたくみそ、つくりごとな申しそ」（『俳諧団袋』「俳諧一言芳談」）と言った。西鶴は文学のことばを寓言とみなし、偽りを表現する嘘とは違って、真実を表現するために借りてきた表現、と考えた[20]。寓言は、表現の面白さや深さを導き出す。死という名の敗北の恐怖と背中合わせの梅毒に勝つための戦略を、病と薬の合戦という寓言によって表現する方法は、長く苦しい治療期間を要する梅毒にふさわしい。難治性の梅毒患者は、治癒の物語や再燃の物語といったさまざまなレベルの物語を担う。擬人化された合戦物における薬軍の勝利は、後悔や絶望の物語を希望溢れる未来の物語へ転換する装置となる。櫟陰散人は、そういった本書の性格を理解した上で序文をしたためる。

続く「述意」は、船越敬祐自身による本書執筆の動機だ。「奸医盲医のために誑（あざむ）かれ、遂に不治の症となりて、生涯を誤る者」が数え切れないので、世間の誤解を解き、正しい治療法を説くための書であると力説。船越は「害あるは、盲医の咎なり、薬の害にはあらず」と断じる。治療を困難にしているのは間違った薬の処方だから、そのことを「耳近く世人に告示（つげしめ）さんがために、病と薬の応不応を軍の勝負に喩へて、方剤の加減を述べ明かす」という。この書によって「自ら黴治の径庭を諳んじ知り、盲医の難治を免れ、奸医の悪計に陥ることなからん」と説く。

続いて、「凡例」があり、４箇条が記される。

一　此書専ら通俗を要とすれば、文詞の卑陋は勿論、仮名づかひの違ひ等多かるべし。看る人これを察せよ。

一　一分の体裁、全く小説軍記に倣ふゆへに、交戦のいきおひ、勝敗の状、病薬相攻るに過ぎたることあり、これ戯著の常体なり。

一　澆季の俗徒、奇怪の事に非ざれば悦ばず。故（かるがゆえ）に、今も俗間に行はるゝ三国妖婦伝なるものを仮り用ひて、悪狐の怨念、黴毒王となり、雷震等の神霊、延寿丸等の薬となるといふがご

とき、妄誕の上に妄誕を加ふ。これ全く時俗の悦びを邀へ、この書を熟読せしめんがために して、奇怪を述ぶるを以て、得意とするには非ず。

一　毎国、病賊薬軍を配当するものは、たゞ其大概に従ふ。強て株を守ることなかれ。

仮名遣いに俗用があること、戯作のように誇張した表現があること、黴毒王を三国妖婦伝の悪狐になぞらえて読者の興味を惹きつけたこと、人体国を舞台に病賊と薬軍が戦うようすは医学的には大まかなものであることを説明する。薬剤の用い方をわかりやすく伝えるために、卑俗な表現や誇張表現によって合戦物としての色彩を強めたところがあると断っている。

「述意」は医書としての特性を述べたもの、「凡例」は文芸書（戯作）としての側面を述べたものだ。

次いで、登場人物の紹介図版がある。医者・篤実淳直（写真５）、病賊・黴毒大王（写真６右図）の姿がそれぞれ半丁に大きく描かれ、薬将･延寿丸と治瘡丸（写真６左図）、薬将･黴効散と奇良湯（写真７）、２人ずつ半丁に描かれる。役者絵を得意とした豊春の絵は、精緻な表現で読者を惹きつける。

写真５

写真６

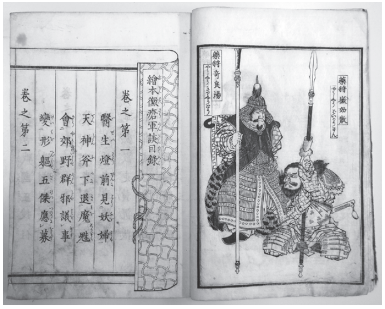

写真７

目録は漢文体である。１章ごとに七言一対の対句形式。巻之第一から第五まで、それぞれ２章、１章、３章、３章、１章で構成される。内容に応じて叙述量が加減されている。重篤化する病を述べる中間部の分量が多い。漢文体を書き下して示す。

巻之第一

医生灯前に妖婦を見る／天神斧下に魔魅をしりぞく

郊野に会して群邪事を議す／形躯を変じて五傑募に応ず

巻之第二

舌戦を試みて国王任を授く／奸謀を挫いて賊徒誅に伏す

巻之第三

敵陣を襲ふて遺毒首を喪ふ／本営を失ふて瘰癧迹を晦ます　血熱黄泥阪に敗走す／下疳陰頭山に滅亡す

元気を養ふて薬将戦を緩む／鋭鋒を拒いで病賊命を殞す

巻之第四

延寿丸勇に矜りて敗を取る／黴効散計を定めて敵を討つ　両雄連に出て苦戦を究む／一将独進んで衆敵を鏖にす　大元帥計りて賊群を平らぐ／倶生神来つて国乱を報ず

写真８　巻之第一挿絵

巻之第五

枯を活かし死を回(かへ)す巧手段／功を遂げ名を全す大団円

目録畢る

附録一巻

黴瘡雑話

6人の人間の体内を「国」に見立てて、その中で、病と薬をそれぞれ将軍に擬人化して戦わせる。以下、各章の内容をたどってみたい。

巻之第一

「医生灯前に妖婦を見る／天神斧下に魔魅をしりぞく」

「夫(それ)天地の間、物各相対あり」と起筆。天と地、陰と陽、暑と寒、男と女などと同様、薬と病は対の関係にあると説く。黴毒薬を研究する医師・篤実淳直が、「黴毒の治術」を完成させたが、陳司成『黴瘡秘録』の言説を信じる者が多く、淳直の治療法は顧みられない。悔しく思いながらも日夜黴毒について研究する淳直の前に、ある夜28歳ぐらいの美女が現れ、黴毒の精霊であると名乗る（写真８）。元は金毛九尾白面の狐であり、妲己・斑足王・玉藻前として知られた妖狐であるという。安部泰親に那須野に封じ込められたが、再び唐土によみがえり、黴毒という「難治の悪疾」となったと出自を明かす。中国、日本の梅毒治療史に言及し、「我れに敵する者、世の常の病とおもふがゆへに、全治の功を得ざるなり」とこれまでの治療法が誤っていることを指摘する。そして、淳直に治療を止めれば無病長命を約束すると言う。しかし、淳直は「永く病根を絶尽すべし」と一歩も譲らない。すると妖婦が淳直に飛びかかり、口から毒気を吐く。淳直が硬直していると九尺ほどの身の丈の大将が現れ妖怪に斧を振り下ろす。妖怪は「遠からずおもひしらせん」という捨て台詞を残して立ち去る。大将は殷と戦った周の武王の臣・雷震だと名乗る。淳直を導いて悪霊退治をするのだと言う。二人は紫雲に乗って虚空を走り行く。

「郊野に会して群邪事を議す／形躯を変じて五傑募(つのり)に応ず」

黴毒大王は、美女と化し、長崎丸山遊郭の女体国から男体国へ潜入し、人体国を滅ぼそうと企てている。福徳自在衛門の家の腰元となって彼の一家の人々と交わり、自分の精霊を体内に侵入された。黴毒大王は、人々が、五宝丹、紫金丹、山帰来剤、六物解毒湯、捜風解毒湯などの「弱将」に頼るように仕向け、激剤である軽粉嗅薬、生々乳、そつぴる、どろしす、かるめらなどを遠ざけるようにしている。太公望だけが手強い神将であると言う。淳直は人体国で黴毒大王の一味と戦うことを宣言する。雷震が前世でもともに妖狐と戦ったメンバーを薬将として集める。自分は延寿丸となり、さらに黴効散、治瘡丸、奇良湯の薬将を揃えて戦うことにする。そこへ福徳自在衛門の倶生神[21]が助けを求めに現れた。太公望は淳直が人体国に潜入できるように飛行自在な透明体に変じる。自分は公務があり天を離れられないと言って、淳直と４人の薬将を福徳自在衛門の人体国へ派遣する。

巻之第二

「舌戦を試みて国王任を授く／奸謀を挫(くじ)いて賊徒誅に伏す」

まず、人体国が小天地であるという賢者のことばが紹介される。天地の構成要素である五行（木・火・土・金・水）と人体の構成要素は同じであるという。そして士農工商からなる国が、国家の

主の不正不実により滅亡するように、人体国が病国となったときは医国王としての主人公、つまりその人自身が不実である場合は滅亡を免れないという。

福徳自在衛門国では、国王が淳直らを拒んだので、淳直と軍将らの舌戦がはじまる。山井養民、部良棒庵などの大元帥、副元帥ほかの軍将はそれまで服用してきた薬の擬人化だ。倶生神は延寿丸ら神将によって薬軍を滅ぼして欲しいと進言するが、国王はそれを奸言として退ける。淳直は延寿丸の薬効を説き、従来の処方の誤りを指摘し、黴毒の治りにくさを強調する。また、一見治ったかのように見えて病気が再燃することと薬毒の違いを説明する。補薬の大将などを用いながら根気強く薬を用いることが重要だと語る。そして『黴瘡瑣談』『黴瘡雑話』を読むように勧める。軍将らが次々淳直と一問一答を繰り返し、中には「先生の高論皆実見にして、我等が及ぶ所にあらず、向後は先生とあをぎ、軍術指南を受くべし」と申し出るものも現れる。淳直は、人体国と薬の関係や、伝染病の種類と症状について解説する。そして黴毒と他の病との違いを説明する。

突如滑田順才、不実貪欲という二人の将軍が躍り出て、黴毒王の命を受けて医者となって人体国へ入り込んだのだから、邪魔をするなと淳直に襲いかかる。延寿丸と黴効散が二人を打ち倒す。それをみた国王は驚き、病将がなりすました医者にしたがっていた我が身を恥じ、国中を巡見して、脈道、腹部、頭、唇、舌の要害にある賊軍と戦うことを決意する。

（巻二末には「輔神丸」という吐き下し薬の広告が掲載される。）

巻之第三

「敵陣を襲ふて遺毒首を喪ふ／本営を失ふて瘰癧迹を晦ます」

ここでは黴毒の諸症状が黴賊として擬人化される。瘰癧腫高と遺毒抜兼である。淳直は長期戦ではなく短期決戦の布陣をとる。薬軍を使って遠攻めをしたのちに、夜討ちを仕掛け鉄砲で病軍を一掃する。病人に体力をつけてから強い薬（延寿丸）を使って一挙に病魔をたたく方法である。鉄砲に狙われた黴兵が次々倒れ、延寿丸の攻撃に敵兵は落ちていく。遠攻めのあとの鉄砲は、時宜を得て処方された延寿丸の薬効のメタファーである。淳直は「全治の国」とはいえないと警告しつつも、延寿丸とともに黴賊に侵された属国へと赴く。

「血熱黄泥阪に敗走す／下疳陰頭山に滅亡す」

淳直は属国「福徳長禄」に赴く。ここには下疳早成、骨痛動須という賊将が国の入り口である陰頭山に陣取っていた。黴毒菌による生殖器の炎症と関節の硬直・疼痛が擬人化されている。多くの黴毒患者が苦しむ症状である。二人の賊将の乱暴により「国民等苦悩にたえず」とある。延寿丸が大黄牡丹皮湯の助けを借りながら、みごとに賊将を討ちとる。国王は大いに悦ぶ。淳直は四天王とともに次の属国へと向かう。

「元気を養ふて薬将戦を緩む／鋭鋒を拒いで病賊命を殞す」

３番目の国は「福富万吉国」である。万吉国では上攻結毒と痔疾痔瘻が、「口中門、穀道門に陣を張り」、嚥下困難にしている。食欲のない患者の補薬である十全大補湯が用いられる。補薬なので「温和の将」として擬人化されている。また黴賊が頭脳山に及んでいる。延寿丸が頭頂へ赴き、黄全大補湯は足下に向かい、連珠砲により敵兵を倒し、最後は延寿丸と二人の黴賊の対戦となり、黴賊二人は手負いのまま敗走する。次の属国から倶生神がやってきて延寿丸の出兵を要請する。淳直はしばらく留まり、「乱後治世の術」をする。予後の管理である。

巻之第四

「延寿丸勇に矜(ほこ)りて敗(やぶれ)を取る／黴効散計(はかりごと)を定めて敵を討つ」

４番目の属国は「助八国」である。結毒難治(けつどくなんち)・蝋燭下疳(ろうそくげかん)の二将が分身の術などを使って国中の通りで延寿丸に襲いかかる。形勢不利となった延寿丸は、万吉国の淳直に助太刀を求める。淳直は黴効散を呼び出し、延寿丸への加勢を命じる。賊徒を打ち倒した黴効散が凱旋し、国王は大いに喜ぶ。淳直は乱後の仕置きを詳しく言い残して次の国へ向かう。

「両雄連(しきり)に出て苦戦を究む／一将独(ひとり)進んで衆敵を 鏖(みなごろし) にす」

５番目は「金吉国」である。便毒腫満(べんどくはれみつ)と楊梅瘡広成(ようばいそうひろなり)との戦いを描く。淳直は国王に謁見し巡見を申し出る。黴毒王は秘策を用いる。楊梅瘡広成が108人に分身し、延寿丸を包囲する。黴毒の楊梅状の発疹が全身に広がるイメージである。形勢不利な延寿丸を応援し、黴効散･黴毒散が4,500騎の消魔風の熱風で敵を退散させる。治瘡丸が奇襲の前に酒宴をはり、敵をおびき寄せ、楊梅瘡広成と便毒腫満を討ち倒す。病将が楊梅瘡といわれた梅毒の症状が全身に広がること、腹水がたまり膨満感がある胃腸の症状から命名されていることがわかる。

「大元帥計りて賊群を平らぐ／倶生神来(きた)つて国乱を報ず」

６番目の「福松国」は、もともと「勢力勝れたる国」であったが、疥癬穢(かいせんきたなし)と雁瘡癒兼(がんそういえかね)に攻められ侵略されていた。しかし、防戦の功あって「皮表の戦い」に終始していた。免疫力が高く、皮膚の炎症だけで、内臓や骨髄は侵されてはいない。黴毒大王が小便道に援軍を送り、排尿困難にする。薬軍の負色が濃くなるが、治瘡丸が軍勢を引き連れて鬨の声と共に名乗りをあげる。槍をもって戦うが、黴軍に追い立てられてしまう。淳直は延寿丸に退治を命じ、賊軍を一人残らず討ち果たした。

そこへ、自在衛門国から倶生神がやってきて、国王の油断により奸臣の讒言にそそのかされ、薬兵を遠ざけ放蕩にふけったため国が滅亡の危機にあると訴える。淳直はできるだけのことはするが、「必ず治すべきや否やは知らず」と、根治が難しいかもしれないことを告げる。倶生神は、国が滅んだとしても淳直の治療を受けることができれば本望であると言う。いよいよ黴毒大王との最終決戦に向け、淳直は薬将たちを従えて本国へと向かっていく。

巻之第五

「枯を活かし死を回(かへ)す巧手段／功を遂げ名を全す大団円」

再び自在衛門国にやってきた一行は、衰弱した国の様子に呆然となる。国王は奸臣の色欲・貪欲・衣服美麗を侍らせている。国王は、衣服美麗元帥と心を合わせて国を治めているから大丈夫だと言う。淳直と美麗公らの論戦により、国王は自分がだまされていたことに気づき奸臣を追放する。そこへ黴毒大王自らが出撃してくる。形勢は一進一退。延寿丸とその部下が黴軍を包囲し黴毒大王を追い詰める。延寿丸が黴毒大王の正体が妲己であることを暴き、首をはねる。本性が黴毒大王の体から抜け出て「今は本の栖処に変える」と言い残して敗走する。淳直らは、黴毒大王主従の首を首桶に入れ、体は焼き払い勝ち鬨ををあげる。淳直と四天王は国王一行に国境まで見送られて惜しまれつつ、自在衛門国を離れる。

雷震が現れて「一刻も早く御身の内へ帰り給へ」と淳直の背中を突くと、真っ逆さまに落下。「あっ」と叫びその声に目が覚めた。淳直は書斎の中にいた。「是南柯の一夢にして」「人体国とは人の一身、国王主人公とは人の心なり、倶生神とは守り神なり」と理解する。

奇良湯、治瘡丸のさじ加減に示唆を得、アイデアだけだった延寿丸、黴効散を精製する。患者に与えてみたところ、夢の中と同じ治療効果が得られた。４つの薬を黴薬四天王と名付けた。評判となり、薬を求めるものが後を絶たなかった。

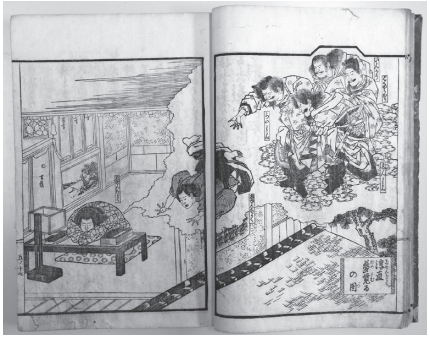

写真９　巻之第五挿絵

故事「南柯の夢」は、唐の淳于棼（じゅんうふん）が南柯国の長官となって20年間の栄華を極めたが、それが一睡の夢だったことから、はかないことのたとえである。しかし、淳直の夢は治療の啓示を与えた。「淳直」は、南柯の夢の「淳于棼」を響かせた名前だろう。

以上みてきたように、本書は薬名を薬将に、症状を病将に擬人化、頭部・臀部などの身体部位や臓器を人体国の地名に擬物化する。人体国を６国としたのは、梅毒の病期の症状が多様で、また、人によっても症状の出方が違うからだろう。薬将たちのさまざまな交戦スタイルは、病人ひとりひとりの体力・症状に応じて薬の組み合わせや量を変えなければいけないことを示す。巻之第五の自在衛門国で、奸臣に陥れられ病将が盛り返すのは、梅毒が再燃しやすく、医師と病人が心を合わせて根気よく治療しなければならないことを伝える。梅毒に精通した医師や患者にとっては、真に迫るストーリーだ。

最後に６丁の「附録」がある。先に出版した『黴瘡瑣談』の内容と重なる部分が多い。医学的見地から梅毒の発生と伝播、梅毒の経過、過去の治療法と現行の治療法、それらの難点、そして梅毒治療の難しさを説く。自分が梅毒に罹患し、一般に処方されている薬（七宝丸）では効果が無く、延寿丸を試したときのことも詳述し、一般の薬では治療に５年を有するが、延寿丸であれば４、５ヶ月で全治するという。最後に、自在衛門国をはじめとして、すべての人体国の記述が、梅毒のどのような疾病段階と症状を表現したものであるかを説明する。

「附録」には本書執筆の目的が次のように書かれる。

> 余が此書を著すは、専ら是等の事を世に諭し、長く黴毒の害を免れしめんと欲するのみ。然れば、此病を憂ふる者は、此書と附録の黴瘡雑話とを幾度も読みて、其道理を能々（よくよく）心得、而（しこう）して后（のち）病の有さまによりて、用ふべき薬を用ゆるならば、不実の医者または半識（なまものしり）の医者の薬を用ゆるには、遙かに勝りて、无益（むえき）の月日を送らず、無益の金銭を費さず、病苦も速やかに抜けて、再発もせず、再び伝染するとも无（な）かるべし。此書に載せたる治術、一ツとして虚妄あることなし。もし延寿丸、黴効散の二方をあらはに出さば、天地神明に憚らず、大人君子に慚（は）づべからず。いかんがせん浪遊无禄の医生なれば、糊口の種に此二法を秘して顕はさゞるは心中に深く愧（はづ）る所なり。

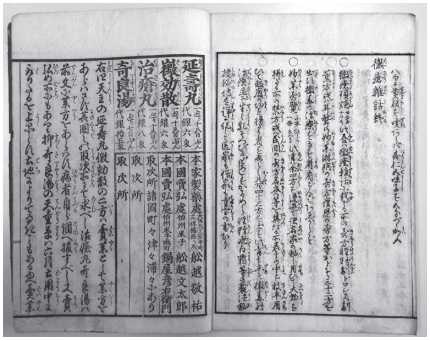

写真10

梅毒の蔓延を抑えたい気持ちが伝わる。間違った情報と治療で時間と金と労力を無駄にし、時には命を落とす人が多いと嘆く。金儲けのために特効薬を隠すのは医療倫理に反するから、誰もが入手可能な薬としたという。

「附録」の終わりに「船越晋再識」とあり、「黴瘡軍談五の巻終大尾」とある。

その後に「黴瘡雑話」が合集される。梅毒治療史を振り返り、梅毒の症状の解説、さまざまな薬の効果・効能・用

法、さらに調剤方法について記載する。延寿丸・黴効散の効果・効能・用量についても詳述する。「黴瘡雑話」は、実践的な梅毒薬専門書である。

巻末には延寿丸・黴効散・治瘡丸・奇良湯の代金と取扱所が付される（写真10）。

延寿丸も黴効散も15日分で銀六匁である。天保期の米相場により現行の通貨に換算すると６匁（15日分）は5,700円に相当する。４ヶ月服用するとして45,600円で黴毒が完治することになる。何年も苦しみ死んでしまうことを考えれば、安いものだろう。海原亮氏の調査[22]によると、近江国蒲生郡小脇郷の惣庄屋今宿家のおりせは「おこり」（喘息発作）のほか、腹痛・頭痛・胸痛・発熱などにみまわれており、加持祈祷・按摩のほか11名の医師の診療を受けている。日記に記されている日付と数字から、少なくとも天保12年（1841）11月には３人の医師に薬代として金２分１朱（約46,000円）、12月には３分３朱（約63,750円）を支払っており、その他２か月分の治療費は軽く10万円を超える。それに比べれば延寿丸の薬価ははるかに安い。

当時は、本屋が薬の取り次ぎをすることは一般的なことであった。長友千代治氏は「江戸後期作者が、また貸本屋も含めた本屋が、製薬や売薬、また売薬の取り次ぎをしていたことは、本の巻末広告や貼り付けの報条などで知られる」と述べる[23]。鈴木俊幸氏は、京大本の筆頭に書かれている須原屋が薬種屋と書物店を併設していたことを指摘する[24]。

しかし、本書は、薬を買うと本代は無償となるという点で異色だ。薬の附録としての読物であるが、医学的にも文学的にも豊かで、寓言として面目躍如たるものがある。

写真11

5　「延寿丸」引札について

内藤記念くすり博物館には、丹青の濃淡による色刷りの「延寿丸」の引札（広告）がある（写真11）。

97.3cm×35.0cmの大きなもので、上段に「人体国病薬合戦図」と書かれ、下段右半分が延寿丸、左半分が『黴瘡軍談』の広告である。

まず、下段を見てみよう。

延寿丸の値段は、巌手醫學文庫『黴瘡軍談』に付されているものと同じだが、製薬所は異なり、大坂の製薬所・宮地賢輔である。広告文は、延寿丸が万能の神薬であることに加えて梅毒がどのような症状の病であるかを記す。「此病初発下疳、便毒、淋病等より変じて、結毒となり、筋骨をくさらし、或は骨節腫痛み、屈伸起居ならず、或は頭痛、或は眼をつぶし耳をつぶし鼻をおとし咽をくさらし声をとめたる者等も、此薬を用ひて治せずといふことなし」、と梅毒の恐ろしさと薬の効能を伝える。

『黴瘡軍談』は、５冊本、３冊本、１冊本すべて代銀五匁五分（約５千円）とあり、「此本売本ならば拾匁ば

かりの物なれども療治をひろめ天下の諸人ひゑしつかさにくるしむものを助けんとてあらはしたるものゆへ、施し印（はん）となし、はん木料とすり賃を捨（すて）、紙代仕立賃のみゆへ如此（かくのごとく）下直也」とある。普通なら10匁のところを紙代と製本代だけで安価に抑えたという。そして説明書きには、梅毒が間違った治療法のために「世にはびこり」、「いたづらに廃人となり」命を落とす人が多いと嘆く。そして「予はゆへあつて若年の時より此治術に肝胆をくだき廿余年の間に数千人を治療」したという。その経験をもとに病を「速（すみやか）に治するの手段をしらしめんために」著述した本で、梅毒患者必読の書であるとする。順正書院に入門した越前の医師・皆川文仲の『状況日記』によると、教科書として『内科撰要』を１分２朱２文（約３万円）で買い求めている[25]。学問的な「物の本」よりも安価な草紙の形態で、そして時には薬購買者への無料頒布や貸本屋によって、豊富な医療情報が提供された。

上段の絵に目を転じてみよう。

右側に絵師・長谷川貞信（1809－1889）の名前がある。大坂の浮世絵師で、四条派絵師・上田公長、浮世絵師・歌川貞升（弘化元年より国升）の元で学んだ[26]。

人体を国に見立てた壮大さと体内の湿潤な環境を伝える繊細さが表現されている。上部に遠山と碧空、左上に岩山を配し、右端に赤松の巨木の幹が弧を描くように配する。その根元の岩を背にして延寿丸が八方睨みで見栄を切る。全体に左上から「つ」の字に流れるような動きがあり、咽喉から腹腔へ広がる体内の空間が、病に冒された世界を表現する。左上の岩窟に「病賊跋扈黴毒大王」が陣取り、右上の馬車に「薬軍大元帥篤実淳直」、中央で刀を振り上げているのが「薬将四天王延寿丸」。左手で「病将ゐどくぬけかね」の刀を受け、右手で「病将げかんはやなり」を討ち、左右の足元に「病将けつどくなんぢ」「病将やうばいさうひろなり」「病将ほねいたみうごかず」「病将べんどくはれみつ」が倒されて転がっている。いずれも『黴瘡軍談』巻三と四に登場した病将たちだ。延寿丸の見栄や、倒された賊が足を上げて転がる様子は、芝居の演出を思わせる。延寿丸の後方、右手に薬将・治瘡丸、中央に黴効散、左手に奇良湯がやや小さめに描かれる。底辺中央に、囲み記事があり、青地に「薬将四天王の妙功病賊を討ち亡し人体国を平治せしむ」と、物語の大団円を強調する。

延寿丸ほか薬将四天王の名前（梅効散・治瘡丸・奇良湯）は漢字表記だが、病将はほとんどひらがなで書かれ、脇に簡単な解説が付されている。たとえば「病将けつどくなんぢ」には「此ぞくこしつとなりてなをらぬものなり」、「病将上こうけつどく」には「此ぞくかしらへのぼりていろ／＼のがいをなす」などである。

内藤記念くすり博物館は、そのほかにも多くの薬の引札を所蔵する[27]。引札には、鎧をつけた武士姿の薬と妖怪風に描かれた病気の合戦図が多いが、鎧の上の顔は、丸薬そのものだ。旗印に薬名を掲げたり、目鼻に代えて丸薬に薬名が記されたりする。それに対して、この引札は、薬将も病将も擬人化された描き方で、『黴瘡軍談』の内容を忠実に反映する。『黴瘡軍談』の挿絵の影響もあるだろう。

多くの引札の文字は絵の中に書き込まれるが、この引札は下半分を薬と本の宣伝にしているので、医療情報が多い。絵は『黴瘡軍談』の物語をなぞる。蝙蝠をあしらった雷文の枠で全体を囲む意匠も目を引く。

6　船越敬祐の梅毒治療について

そもそも梅毒とはどのような病気だろうか。

梅毒は、梅毒トレポネーマという病原菌の感染でおこる。日本感染症学会梅毒委員会が2018年６月に策定した「梅毒診療ガイドライン」[28]によると、長期にわたり複雑な進行形態をとり、あらゆる臓器に慢性炎症をもたらし、全診療科にわたる症状を起こしうる。病期は、１年未満の早期と１年以

上経過した後期に分けられ、早期は感染後１ヶ月以内の第１期と感染後１ ～ ３か月の第２期、後期は第３期である。

〇第１期：感染後１か月前後。侵入門戸（口唇、口腔咽頭粘膜、陰部周辺、肛門周辺）に丘疹、びらん、潰瘍などの一次病変がある。
〇第２期:感染後１ ～ ３か月。紅斑、丘疹、脱毛版、肉芽腫などの皮膚病変があり、梅毒性バラ疹、丘疹性梅毒疹、扁平コンジローマ（肛門や外陰部にできる扁平隆起状の結節）は典型的な皮膚の二次病変である。
〇第３期：感染から１年以上経過。病状は侵されている臓器によって様々である。無症状のこともあるが、無症状でも要治療と判断されるものは潜伏梅毒に分類する。心血管症状、ゴム腫、進行麻痺、脊髄癆（脊髄の後根と後索が変性し、下肢の激痛、腱反射消失、瞳孔障害、さらには、運動失調・知覚障害・筋萎縮を起こす）など、臓器病変が進行した状態（活性梅毒）。

病期を伴わない分類として、「潜伏梅毒」（自覚症状はないが、要治療と判断される活動性梅毒）と「先天（性）梅毒」（活動性梅毒の妊婦からの胎内感染）がある。

国立感染症研究所によると、日本では1990年代以降の患者数は年間1,000人を下回っていた[29]。しかし、2013年、梅毒の患者数は1,200人を超え、その後、年々増加。2017年は5,770人、2018年は９月の段階で5,081人。女性患者も増えており、特に20代女性が急増、性産業従事者に限らず、一般家庭の主婦などにも広がる。妊婦から胎児に感染する「先天梅毒」も増加傾向にある。

中西淳朗氏によると[30]、日本での梅毒の記録は竹田秀慶『月海録』（1512）が初出。秀慶は京都の人である。甲斐国都留郡の妙法寺の古記録（1513頃）にも梅毒が出てくるので、1510年頃に南方に侵入した梅毒が、わずか３年で山梨県東部に達したことになる。氏は、16世紀後半の梅毒患者数は、人口1,000万に対し200万人に及んだのではないかと推察する。近世初期、梅毒は誰でも罹りうる新興感染症であり、梅毒にかかったことを恥じる風潮はみられなかったという[31]。一方、梅毒によって身体障害が残った場合には、非人集団に入り、激しい皮膚症状は「癩」同様に嫌悪の対象となった。17世紀末から18世紀前半になると、症状に対する嫌悪だけでなく、自堕落な生活による病という道徳的非難が加わる。18世紀後半以降は、梅毒が広く都市社会に蔓延したのに伴い、梅毒の専門医学書が相次いで刊行される[32]。

治療には山帰来（サルトリイバラ）を使った生薬が用いられていたが特効薬ではなかった。安永４（1775）年、蘭医ツュンベリーが水銀駆梅療法を伝え、軽粉（塩化第一水銀）が塗布剤や嗅ぎ薬として全国に広まる[33]。水銀剤はヨーロッパでも多用されたが、用法を間違うと水銀中毒となり、死に至る場合もあったため、非水銀薬が開発されたこともあったという[34]。幕末になると杉田玄白はじめ多くの蘭方医はソッピルマ（塩化第二水銀）を用いたが、高価で副作用も強かった。玄白の弟子の江馬蘭斎は、水銀剤を嫌い、蜀葵（しょっき）（カラアオイ）やカミツレ（カモミール）など薬草による蒸気風呂療法、局所薬浴を生薬内服と併用した。

船越は、水銀剤の副作用に苦しんだ経験から、延寿丸と黴効散を開発した。また、治療器具として、「ゴムカテイテル」を製作した[35]。延寿丸について、『黴瘡瑣談』（牧野文庫本）では、「延寿丸類方」として、「一名苦鰯丸と号す。此方尤妙効あり／延寿丸の本方は禁方秘録にいだす」と記す。「梅毒の諸症新痼軽重遠年近日をとはず百薬効なき者を皆速に治す」として20種類以上の症状や病気に効果があると宣伝。「苦参」「蛇蛻」「鰯霜」「風茄子霜」「大黄」「煤」と「重粉」[36]による調剤法を記す。しかし後刷本である城西大学本『黴瘡茶談』では、同じ丁の延寿丸の説明が、「延寿丸主治（しゅのう）」と書き

換えられている。効果・効能の説明部分を残して、処方の部分が削られ、不自然な空白が残る。薬の販売、あるいは治療法をめぐって複雑な事情があったのだろうか。

『黴瘡瑣談』の附録「黴瘡治験」に載る患者37名の症例は、現在の症例検討に相当する詳細なものだ。延寿丸の瞑眩反応から患者が服薬を拒否したり、今でいうセカンドオピニオンを求めた患者が、延寿丸のような安価な薬は信用できないと言われ服用を止めたりして、命を落とした事例も書かれる。

船越の処方はどの程度普及していたのだろうか。彼の著作が後の医学書に医学的な影響を与えた痕跡もない。擬人化合戦物の『黴瘡軍談』を書いて、広く世に延寿丸や黴効散の治療実績を宣伝したのは、船越の医術に対する世間の不信感をぬぐうためでもあっただろう。

問答形式で書かれた『黴瘡瑣談』やその後ろに付される「黴瘡治験」は、素人にもわかりやすい。ときに巧みな比喩表現を用いて説得力を持たせてもいる。船越には文才があった。

7　おわりに―梅毒のナラティブ

ルネッサンス期のイタリアのジロラモ・フラカストロ（1478－1553）は「梅毒の父」と言われる。梅毒の感染源が「粒子」であると考え、梅毒を論じたラテン語の六歩格詩『シフィリスあるいはフランス病』（Syphilis sive morbus Gallicus:1530）を表した[37]。

この詩は、太陽に反逆した羊飼いのシフィリスを罰するために太陽神アポロが梅毒に罹患させたというストーリーである。このことを紹介しつつ澁澤龍彦は、「貞操帯と梅毒こそ、野蛮であった中世ヨーロッパの性生活、二つの相対立する極のようなものである」とし、「梅毒という表示義が娼妓、貧困、下級階級、無教育、不品行、自業自得、不幸な結婚という共示義を生み出す」という[38]。

また、須賀敦子はエッセイ「ザッテレの海岸で」において、イタリアの娼婦と梅毒について綴る[39]。ある時、須賀は、ヴェネツィアで「Rio degli incurabili. リオ デリ インクラビリ」という小さな水路の看板を見つけて疑問に思う。

> リオはいい。だが、そのあとにつづくincurabiliという標記が私の足をとめたのだった。インクラビリ。治癒のあてのない、もう手のつくしようのない病人を意味する言葉なのだが、最初それを見たとき、私はおもわず笑ってしまった。なおる見込みのない人たちの水路。なんだか自分のことをいわれているみたいだった。だが、とっさの不謹慎な思いを押しのけるようにして、インクラビリという、冗談では済まされない言葉の重さが、胸を衝いた。

このときから数年を経て、須賀は「なおる見込みのない人たち」が梅毒に罹患した娼婦たちだったことを突き止める。水路の看板の向こう岸にはレデントーレ教会が建つ。須賀はザッテレの河岸から眺めるレデントーレ教会の景色を好んだ。

> ザッテレの河岸に私がやって来る理由はもうひとつあった。ひろびろとした運河の対岸に、パッラーディオの設計になるレデントーレ教会がほぼ正面に眺められるからだ。この建造物を通して、私は、この十六世紀を代表する建築家を理解し、愛することを覚えたように思う。そして、まるでそのことをたしかめるみたいに、私は、夜、船着き場の雑踏がしずまるのを待ってこの河岸になんどか来たことがある。深いブルーの空の下、照明をうけて燦然とかがやくレデントーレを見て、ほっとして宿にもどる。
>
> この教会が再度ヴェネツィアを襲ったペストの終焉を願って、《レデントーレ＝人類の罪をあ

がなうキリスト》に捧げられ、建立されたのは十六世紀の後半である。運河の水面を広場に見立て、静かに流れる水面をへだてて見るときだけ、この建築の真の量感がつたわるという非凡なアイデアを編み出したパッラーディオは、竣工後わずか四年で、内陸の都市ヴィチェンツァで生涯を終えている。

「果てしない暗さの日々を送っていた娼婦たちも、朝夕、こうして対岸のレデントーレを眺め、その鐘楼から流れる鐘の音に耳を澄ませたのではなかったか」。ペストと梅毒という疾病に圧倒された中世の闇と祈りを景観から読み解く筆致は胸に染みる。

フラカストロが梅毒を詩に書き、澁澤が梅毒とエロスの関係を論じ、須賀が河岸の風景と結びつけてエッセイを書いたように、梅毒は常に浪漫的叙情的なナラティブ（語り）とともにあった。しかし、擬人化によって梅毒そのものを小説の題材にした船越の方法は特筆に値する。

梅毒は、そのイメージが下級娼婦や都市下層民と結び付けられ恥ずかしい病とされてきた。梅毒は隠された病だった。現代社会においても同じである。抗生剤による治療法が確立しているにもかかわらず、マイナスのイメージがつきまとう。

自らも梅毒罹患者となり長年病苦と戦ってきた船越は、合戦というメタファーにより、病と戦い、病に打ち勝つイメージで病者を鼓舞する。作品冒頭の「述意」では、「もし延寿丸、黴効散の二方をあらはに出さば、天地神明に憚らず、大人君子に慚（は）づべからず」、と薬を使って病に打ち勝つことの正しさを強調する。

『黴瘡瑣談』巻末の『黴瘡軍談』の広告には、「此書は梅毒と薬と交戦なさしめ治術を軍術になぞらへ治験を軍談とし面白く戯著して時俗の悦（よろこび）を邀（むか）へ此書を熟読せしめ自ら黴毒治術を知得せしむるものなり」とある。合戦物という戯作的な面白さに加え、軍談として国主と薬将、薬将と病将の問答をとおして症状や薬の情報を伝えることが、本書の特徴だと強調する。

『黴瘡瑣談』では、船越自ら、治癒後に梅毒患者である遊女５人を相手にし、再び感染したが延寿丸で治し、その後やはり梅毒に罹患した遊女10人と関係を持ったが梅毒にはならなかったと明かす。梅毒医としての執念と自信の表れだろう。

長田秀雄の小説『歓楽の鬼』を解析する上田泰輔氏[40]は、梅毒言説には、「侵す」という語が多用されるという。氏は梅毒と「戦争との間にイメージの連接」をみる。梅毒は明治期に「花柳病」また「亡国病」ともいわれた[41]。『花街征伐』（1906）は、梅毒によって国が亡びないために花街を廃止すべきだと強く主張する。社会的な弱者を侵すことで社会の構造を揺るがせ、国を亡ぼすほどの病であるというのだ。

『黴瘡軍談』の背景には数多くの動物寓話や異類合戦物など擬人化の文芸史がある[42]。リズミカルな力強い文体による生き生きとした薬将の描写や戦いぶりの表現は、読者を飽きさせない。このような読物としての面白さが、船越の治療の実績に裏打ちされていることを、医学的視点から再検討する必要がある。身体を人体国と見立て、薬と病を擬人化し、合戦物という寓意を用いて、病への勝利宣言をする。煩瑣で荒唐無稽に思える黴軍の将軍たちの名前は、梅毒の症状に正確に対応する。どの薬がどの症状を抑えるのか、薬理的かつ臨床的な読み取りが可能だ。絵空事によって医の真実を伝える。寓言による文理融合の書といえよう。

船越は、なぜ病になったかを問わない。どうすれば病を克服できるかを問う。『黴瘡軍談』は、後ろ向きの梅毒イメージを払拭し、病に向き合う強さを喚起する書として、文学史的にも医学史的にも読み直されなければならない。

【注】

＊『絵本黴瘡軍談』は続帝国文庫『万物滑稽合戦記』（石井研堂校訂、博文館、1901年４月）に翻刻。本稿では、巖手醫學文庫本をテキストとして用い、送り仮名句読点を補った。

（１）平林香織他「岩手医科大学附属図書館所蔵和漢古書の書目一覧」（『岩手医科大学教養教育年報』第50号、2015年12月）、『岩手医科大学創立120周年記念誌―誠のあゆみ、未来へつなぐ』（2017年４月）参照。

（２）豊岡瑞穂『古典文藝論叢』第６号（2014年３月、龍谷大学）参照。

（３）「礎」１～12（岩手医科大学父兄会報『啐啄』51号〈2003年12月〉～62号〈2007年８月〉）参照。

（４）浦田敬三・藤井茂『岩手人名辞典』（財団法人新渡戸基金、2009年６月）参照。

（５）國本惠吉『岩手の醫學通史―探訪と発掘―』（日刊岩手建設工業新聞社、1987年６月）、『盛岡藩醫學教育史』（自費出版、1992年１月）参照。

（６）船山賢一氏所蔵。氏は佐藤洋一氏の御岳父で、岩手医科大学第４期生。船山氏御令嬢・佐藤由香子氏は盛岡市下ノ橋町で船山内科クリニックを開院しているが、御尊祖父・船山賢氏は同じ場所で産婦人科を開業していた。仙岳は下ノ橋にある盛岡高等小学校の校長を勤めていたので交遊関係があったのかもしれない。

（７）「盛岡の先人たち　第94回新渡戸仙岳」http://www.city.morioka.iwate.jp/shisei/moriokagaido/rekishi/1009526/1009578/1009622.html

（８）山本四郎『新宮凉庭伝』（ミネルヴァ書房、2014年８月）参照。

（９）大橋珍太郎の著書は岩手県立図書館で閲覧可能。

（10）『校本宮澤賢治全集』第６巻（筑摩書房、1976年１月）に掲載。石寒太『宮沢賢治の全俳句』（飯塚書店、2012年６月）に解説がある。

（11）『新校本宮沢賢治全集』第15巻書簡本文編（筑摩書房、1995年12月）参照。

（12）前掲注（４）『岩手人名辞典』参照。

（13）その他に菊池仙夫寄贈本が７冊ほどある。高橋和孝・家井美千子「岩手大学図書館所蔵の『宮崎文庫』を中心とした古典籍のアーカイブ化に向けて」（『アルテスリベラレス／岩手大学人文社会科学部紀要』第96号、2015年６月）によると、菊池仙夫は兵学関係書を岩手師範学校にまとめて寄贈しており、現在岩手大学図書館所蔵「宮崎文庫」に収められている。盛岡藩士だった可能性が高いという。

（14）文化庁ホームページの文化デジタルライブラリーの解説（http://www2.ntj.jac.go.jp/dglib/）による。

（15）この「著書目録」は、城西大学水田記念図書館所蔵の『黴瘡瑣談』の終わりから５丁目に挿入されているものと同一。大同薬文庫本は「黴瘡雑話」のあと、「商人買物薬案内」「御書物仕立所」として大坂の播磨屋五郎兵衛の広告を掲載する。

（16）森納・安藤文雄『因伯杏林碑誌集釈』（1983年２月）参照。

（17）『黴瘡瑣談』の引用は、すべて城西大学水田記念図書館所蔵本による。

（18）「荘子」の本文の引用は、『新釈漢文大系』第８巻（市川安司・遠藤哲夫著、明治書院、1967年３月）による。

（19）長島弘明「寓言」（『国文学　解釈と教材の研究』七月臨時増刊号「キーワード100古典文学術語集」至文堂、1995年７月）参照。

（20）篠原進氏は、西鶴の寓言を、「〈今〉を撃つための」レトリックと捉える（「二つの笑い―『新可

笑記』と寓言」〈『国語と国文学』平成20年６月号〉)。

(21) 倶生神というのは「人が生まれた時から、その左右の両肩の上にあって、その人の善悪の所行を記録するという同名、同生の二神」(『日本国語大辞典』) である。

(22) 海原亮『近世医療の社会史　知識・技術・情報』(吉川弘文館、2007年10月) 参照。

(23) 長友千代治『江戸時代の図書流通』(思文閣出版、2002年10月) 参照。

(24) 鈴木俊幸『書籍流通史料論序説』(勉誠出版、2012年６月) 参照。

(25) 海原亮『江戸時代の医師修行　学問・学統・遊学』(吉川弘文館、2014年11月) 参照。

(26) 貞信の画業については、松平進編『初代　長谷川貞信版画作品一覧』(和泉書院、1997年４月) 参照。

(27) 野尻佳与子編くすり博物館収載資料集②『くすりの広告』(内藤記念くすり博物館、1995年５月) 参照。

(28) 日本感染症学会梅毒委員会策定PDF版http://jssti.umin.jp/pdf/syphilis-medical_guide.pdf

(29) 国立感染症研究所ホームページ (https://www.niid.go.jp/niid/ja/) 参照。

(30) 中西淳朗「駆梅処方の変遷史話―水銀と蜀葵研究の歩み―」(福田眞人・鈴木則子編『日本梅毒史の研究-医療・社会・国家』〈思文閣出版、2005年６月〉所収) 参照。

(31) 鈴木則子「江戸時代の医学書に見る梅毒観について」(前掲注 (30) と同書所収) 参照。

(32)『明治前日本医学史』では江戸時代に日本独自の治療法を記載した梅毒書として、和田東『黴瘡一家伝』、橘尚賢『黴瘡証治秘鑑』(明和８年〈1771〉) 以下、計12冊を紹介。中国では『石山医按』(王機字は省之) 1533年が初めて楊梅瘡を説いたのを皮切りに、15世紀・16世紀に16冊ほどの梅毒関連書が刊行され、とくに『黴瘡秘録』(陳司成、1632年) は我が国でも広く読まれた。船越も自著で言及し治療法の誤りを指摘する。江戸後期になると、杉田立卿『黴瘡新書』(文政４年〈1821〉) 華岡青洲『黴梅弁惑論』(天保９年〈1838〉) など蘭学の影響を受けた梅毒書が輩出する (『明治前日本医学史』が紹介するのは11冊)。

(33) クロード・ケテル『梅毒の歴史』(藤原書店、1996年９月) 参照。

(34) 前掲注 (30) に同じ。

(35)「新製ゴムカテイテル」の広告について、杉本つとむ氏は「天保14年 (1483) 作成の販売広告をみつけました」として、まったく同じ広告文を紹介しているが、出典を明らかにしていない (『江戸の阿蘭陀流医師』早稲田大学出版部、2004年12月)。「船越敬祐もどのような人物か判明しません。医療器具を専売していたのでしょうか」と付しているので、船越の著作の『黴瘡瑣談』あるいは『黴瘡軍談』の巻末のものと知らずに引用したのか、あるいは、さらに別の場所にこの「ゴムカテイテル」の広告が載っていたのか、不明である。

(36)「重粉」は「万国になし。余がくふうにて一家の秘薬」であるという。「軽粉、生々乳、ソッピル、ドロシス、カロメル」などの水銀剤で効果がない者を治す「神薬」であると書かれているが、成分は不明。荻野篤彦氏はやはり水銀剤であろうと類推し、「自分がつくった駆梅剤の優秀性を誇張するものであり、薬の副作用はかなり強く、黴毒の一分は自然に消退する傾向のあることによりこれを特効薬とみなすには問題がある」とする (「医学的見地からの日本の梅毒今昔」〈前掲注 (30) と同書所収〉)。

(37) 英訳はGEOFFREY EATOUGHによるFRACASTORO'S SYPHILIS (ARCA Classical and Medieval Texts,Papers and Monographs 12, Liverpool, Great Britain : F. Cairns , 1984)。伊藤和行「ジロラモ・フラカストロの伝染理論」(『日本医史学雑誌』第43巻第１号、1997年３月) 参照。

(38) 渋澤龍彦『エロスの解剖』(桃源社、1965年７月。引用は『渋澤龍彦全集』第６巻〈河出書房新社、1993年２月〉による) 参照。

(39) 須賀敦子「ザッテレの河岸で」(初出は『ヴェネツィア案内』〈とんぼの本、新潮社、1994年５月〉。引用は『須賀敦子全集』第三巻〈河出書房新社、2000年６月〉による)。

(40) 上田泰輔「治療される身体・思想―長田秀雄「歓楽の鬼」と梅毒言説―」(『日本大学大学院国文学専攻論文集』第３号、2006年９月）参照。

(41) 奈良崎英穂「〈耽溺〉に病む文士―泡鳴『耽溺』と〈梅毒〉神話―」(『城南国文』第17号、1997年２月）参照。

(42) 伊藤慎吾『擬人化と異類合戦の文芸史』(三弥井書店、2017年８月）参照。

【付記】

本研究は、日本学術振興会科学研究費助成事業・基盤研究（C)「江戸後期東北諸藩の学術における文理融合理念と文芸活動を解明する新研究」(課題番号16K02415、研究代表・岩手医科大学・平林香織　2016 ～ 2019年）の一環として行った。また、本稿は、平成30年度岩手医科大学医学部必修科目「研究室配属」の研究成果報告でもある。船井賢一・佐藤洋一両氏、国文学研究資料館、城西大学水田記念図書館及び内藤記念くすり博物館には貴重な資料の閲覧・掲載をお許しいただいた。記して心より御礼申し上げる。